

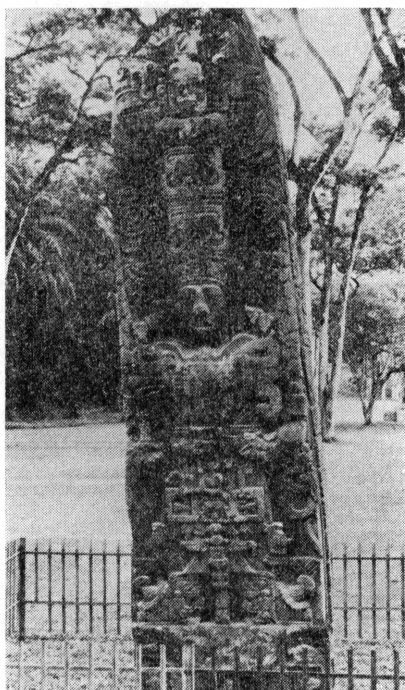
# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## マヤ文字を解く

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5555">http://hdl.handle.net/10502/5555</a>

四章  
時を記す方法



キリグアの石碑D

## 長期暦

西暦がキリストの誕生を起点としてできているように、マヤ暦も暦のはじめとなる日が決まっていた。マヤ人は、このような、ある日が暦のもととなる日から何日たったかを正確に記すことができる絶対暦ともいえる暦表記法をもっていたのであるが、この暦を私たちは長期暦と呼ぶ。

長期暦は五つの期間、または時の単位からなる。その単位は、バクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナル、キンという。キンとはユカテコ語で、日または太陽を意味する。キンが二〇集まると一ウイナルとなり、18ウイナルで1トゥンとなる。そして1カトゥンは20トゥン、1バクトゥンは20カトゥンからなる。トゥンをのぞくと、二十進法に従っている。これらの単位を日に換算すると次のようになる。

1バクトゥン 〓 一四四〇〇〇日 (20×18×20×20)

1カトゥン 〓 七二〇〇日 (20×18×20)

1トゥン 〓 三六〇日 (20×18)

1ウイナル 〓 二〇日

1キン 〓 一日

なぜトゥンのところだけ二十進法に従っていないのか、ほんとうのところはわからないが、お

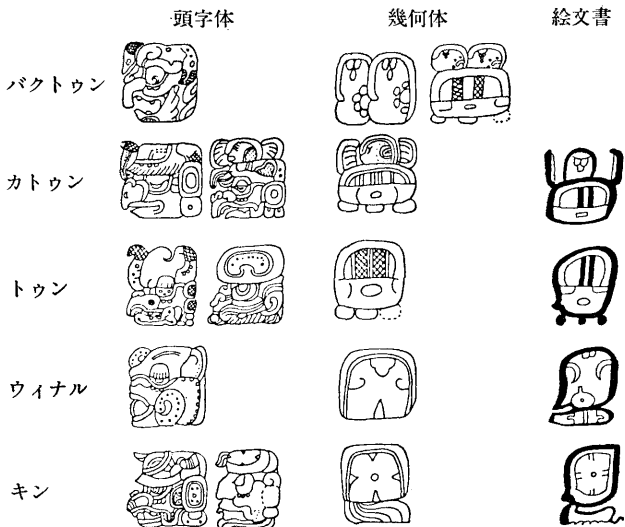


図28 期間を表わす文字

そらく、一年の実際の長さ近づけるために、18ウィナル、日になおすと三六〇日まですでうちきったのであろう。二章で述べた、三六五日が一年のハアブと混同しないようにしてほしい。

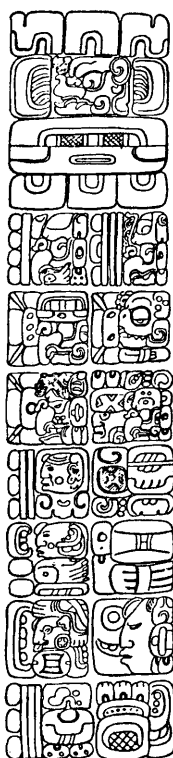
これらの単位の名前はマヤ学者がつけたもので、実際はどう呼ばれていたのかわからない。ただ、キンとトゥンについては、マヤ人もそう呼んでいたようだ。それで慣用に従い、本書でも、バクトウン、カトウンといった呼び方をすることにしよう。

これらの期間を表わす文字にも、頭字体と幾何体の二種類がある。その例を図28に示した。

時はこれらの期間を表わす文字に、数字がついて表わされる。たとえばキリグアの

石碑 E (東面) では (図 29)、バクトウンに点と棒で表わされた 9 の係数がつき、カトウンには 17、トゥンとウイナルとキンには 0 の係数がついて時が表わされている。これを私たちが書く場合には、数字と黒マルを使い、9・17・0・0・0 のように表わす。その日は 13 アハウ 18 クムクになる。

この 9・17・0・0・0 13 アハウ 18 クムクという日は、もちろん暦の起点から数えたものである。その起点とは、13 バクトウン・0 カトウン・0 トウン・0 ウイナル・0 キン 4 アハウ 8 クムクである。



導入文字	
9 バクトウン	17 カトウン
0 トゥン	0 ウイナル
0 キン	G9 F
13 アハウ	E/D
2C	X3
B	10A
18 クムク	

図29 キリグアの石碑 E (東面)  
(A. P. Maudslay 画)

ちょっとみると、 $13 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$  4アハウ8クムクを起点にしているのが不思議に思われるかもしれない。しかし、わかりやすい例は身近にある。時計の針が12をさしたとき、私たちは0時といたり12時といたりする。ちょうどそれとおなじである。0時を12時というように、 $0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$ を $13 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$ というようなものである。つまり、マヤ人は13バクトゥンを一大周期と考えていたのである。

$13 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$  4アハウ8クムクは、それでは私たちの暦ではいつ頃なのであるうか。マヤ暦と私たちの暦との関係については、十指にあまる説がある。そのなかで一番有力なのは、グッドマン・マルチネス・ストンプソンの説である（頭文字をとりGMT説ともいう）。それによると、紀元前三一一年八月十一日（グレゴリウス暦）がその日にあたる（天文暦では三一一年八月十一日）。

$9 \cdot 17 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$  13アハウ18クムクは、 $13 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$  4アハウ8クムクという起点から、9バクトゥン・17カトゥン・0トゥン・0ウィナル・0キンだった日を表わす。日に換算すると、一四一八四〇〇日たった日を表わしている。それは私たちの暦になおすと七七一年一月二十二日である。

これからたくさんマヤ暦がでてくる。マヤ暦がでてくるときにはできるかぎり西暦を添えることにするが、マヤ暦と西暦の関係を大筋のところは知っておいたほうが便利なので、ここで、区

切りになるマヤ暦が西暦ではいつ頃になるかをあげておこう。

8・12・14・8・15 二九二年

(マヤ最初の石碑、ティカルの石碑29)

9・0・0・0・0 四三五年

9・5・0・0・0 五三四年

9・8・0・0・0 五九三年

9・10・0・0・0 六三三年

9・15・0・0・0 七三一年

10・0・0・0・0 八三〇年

10・4・0・0・0 九〇九年

古典期前期

古典期後期

### イニシャル・シリーズ

さてこの長期暦は、ふつう石碑の最初にでてくる。最初に生起するところから、イニシャル・シリーズとも呼ばれている。バクトゥン、カトゥン、トゥンなどの期間を表わす文字が係数を伴って生起するが、その上に、ふつうほかの文字と比べて大きい文字がある。これを導入文字という。

この導入文字はトゥンの文字と二種類の接字からできている。T124と、くし形の接字（T25）または魚の接字（T203）である（図30）。くし形の接字のあいだには、図29にあげたキリグアの石碑Eの場合、頭字体がある。これは三六五日暦の月と関係があり、月が変われば変わる。それゆえ、月の守護神と考えられている。たとえばポップ月だとジャガー、ヤシュキン月だと太陽神である（図31）。



図31 月の守護神

図32は西暦三二〇年にあたる年を記しているライデ  
ン板の導入文字である。ヤシュキン月の守護神が記さ  
れているが、このような初期の碑文には、くし形の接



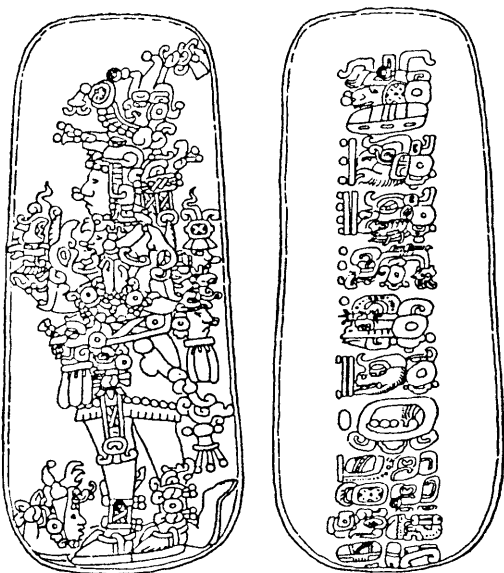


図32 ライデン板 (S. G. Morley 画)

栄えたペラクルス州南部からタバスコ州にかけてのメキシコ湾岸地帯や、チアパス高原のチアパ・デ・コルソ、それからグアテマラの太平洋岸にかけての

長期暦は、紀元前三六年にはすでに存在していた。紀元前三六年の日付をもつ石碑は、チア

字はない。しかし、T124の接字の起源は古く、マヤ以前の石碑にすでに存在する。紀元前三一年の年を刻むトレス・サポテスの石碑Cにすでにみられるのである。そしてイニシャル・シリーズが記されなくなる10・4・0・0・0まで用いられつづける。

いま述べたこととわかるように、長期暦というのは、紀元前にははやくも存在していたのである。そのようなマヤ以前の石碑が発見されたのは、マヤの地ではなく、メソアメリカの母なる文明と称されるオルメカ文明がかつて

パ・デ・コルソで発見されたし、紀元前三一年の日を刻んだ石碑は、オルメカ文明が栄えたトレス・サポテスで見つかった。グアテマラ太平洋岸のエル・パウルでは、三七年の日付を刻む石碑が発見されている。これらはマヤの地に隣接している地域にある。そしてマヤの最初の石碑であるティカルの石碑29より、三〇〇年もはやい日付を刻んでいる。ほぼ同時代のイサパやカミナルフユの石造物も、マヤ以前の原始的な特徴をもっている。さらにそれよりも四〇〇年以上も前の、モンテ・アルバンI期に属する石碑12や石碑13、「踊る人」と呼ばれる石造彫刻物には、点と棒による数表記や暦、一見して暦に関係のない文字、おそらく人の名や地名を表わすと思われる文字まで刻まれている。マヤの最初の石碑であるティカルの石碑29が、デザイン、彫刻技術、文字のいずれをとっても洗練されており、それに先だつ数世紀の発達段階があったことを物語っていることとあわせて考えると、長期暦や文字は、マヤ人が発明したのではなく、オアハカやベラクルスから、グアテマラの太平洋岸を通して、マヤの地にもたらされたということができよう。

マヤ文字の起源を考えるとときや発達過程を考察するときには、このような石碑のほか、トゥンユトラの小像、カミナルフユの石碑10、ハーバークの石碑など、多量の文字をもつマヤ以前の石碑群の研究が必要である。

導入文字のところで脱線してしまった。もとに戻ろう。

導入文字の次は、イニシャル・シリーズが生起する。バクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナ



G3



G2



G1



G6



G5



G4



G9



G8



G7

図33 Gの9つの文字

ル、キンと、大きい単位から小さい単位の順に並び、それぞれに係数がついてマヤ暦が表わされる。係数は前章で述べた丸と棒による表記、または頭字体による数表記で表わされるが、丸と棒によって表わされる場合、つく位置は時代により特徴がある。

ふつう石碑には一つのイニシャル・シリーズしかない。だが二つある場合もある。イニシャル・シリーズが三つ、四つある例もあるが、この順でその例は少なくなり、四つのイニシャル・シリーズをもつものはコバーの石碑1のみ

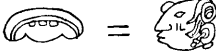
である。

バクトウン、カトウン、トゥン、ウイナル、キンが示すものは、ちょうど私たちの使っている暦の年、たとえば一九八二年にあたり、私たちの月日は、二六〇日暦と三六五日暦のカレンダー・ラウンドに相当することは二章で述べた。しかし、イニシャル・シリーズというのは、それだけではない。二六〇日暦と三六五日暦の文字のあいだには、夜を支配する王や月に関する情報がいり、それらがあわさってイニシャル・シリーズが構成されているのである。

キンのあとにはふつう二六〇日暦がきて、そのあとにGとFと名づけられた文字が生起する。

G は九つの異なる文字からなる集合体で、夜の九王の名、または称号を表わすものと考えられている(図33)。九つの違った文字が順に繰り返されるので、九日を一周期とする暦ということもできる。

G には九つの異なった形があるので、1から9までの番号がつけられている。図29ではG9である。つまりウィナルとキンが0のときはG9なのである。キンが1のときはG1、ウィナルが1でキンが2のときは22日となるので、G4の文字が生起するはずである。トゥンは三六〇日であるので9で割りきることができ、トゥン以上になるとGは関係なくなり、結局「Gはウィナルとキンの係数に支配される」ということができる。この知識も、文字の一部が消えて不明な場合や、Gが複雑でわからないときなど、ウィナルとキンの係数を読み、計算でだすことができるので、知っておくと便利である。



T 23

図34 Fの文字

FはGがなければ生起せず、またGがあるときにはしばしばGと融合するので、GとFは密接な関係にあることがわかる。しかし、Fの意味はいまだによくわかっていない。

Fにも頭字体と幾何体がある(図34)。だがよくみると、Fには三つの書き方がある。図34の1の

例は幾何体である。2は、幾何体の接尾字T23が頭字体に置き換わった例であり、3は、幾何体の結び束を表わす文字素が頭字体に換わった例である。

3の幾何体の結び束が頭字体に換わった例としては、三つの文字をあげたが、それぞれ形が異なる。カエルが上向きになったものと、くちばしに特徴のある鳥と、ジャガーの皮を表わすといわれているもの(T609)である。ジャガーの皮を表わす文字素は、頭字体とはいいがたいのだが、便宜的に3の分類に入れておく。

これら結び束を表わす文字素が頭字体に換わった三例は、どれもたがいに似ていないので、幾何体が同価の頭字体に換わったものとはみなしがたい。だが、同価である可能性もある。もしそうなら、一見してなんの関係もないこれらの文字素は、マヤの思想では密接な関係があった、とみることができると。

2にあげた例、T23が女性の頭字体に換わったこちらの場合は、おそらく同価のものに換わったとみてよいだろう。一方が幾何体で、もう一方はその頭字体とみてよいからである。

T23はいろいろな主字についてでてくる接字である。この接字は、これまでのところ、アル(ꠄ)とかナ(ꠄ)と読まれているが、決定的な証拠はない。T23の同価とみられる頭字体は、おそらく、トウモロコシ神を表わしているとみてまちがいないので、T23の読みは、トウモロコシに関係のあることばが手がかりになりそうである。このような糸口から、ある文字の読み方

四章 時を記す方法



図35 Eの文字

1 手を使ったもの



2 上向きガエル



3 目の接中字をもつ月の文字



4 その他



図36 Dの文字

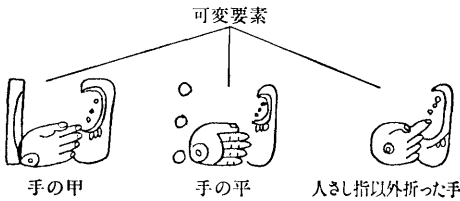


図37 Cの文字

月シリーズ  
 Fの次には、E・  
 D・C・X・B・  
 Aと名づけられた  
 文字がつづく。こ  
 れらは、月に関す  
 る情報を伝えてい  
 るところから、ル  
 ーナー・シリーズ  
 (月シリーズ)と呼  
 ばれている。  
 EとDは月齢を

を推定する方法もあるのである。そうして推定された読みが、T23のでてくるすべての場合に納得できる読みであれば、解読できたことになる。だがいまのところ、このT23に関してはまだ納得いく読みは得られていない。

表わす。月齡が二〇日以下だと、Dのみが一九以下の係数を伴って生起し、二〇日以上のときは、EがDとともに生起する。つまりEは二〇を表わし(図35)、そのときの係数は九を超えない。二九日までの数がEとDにより表わされるわけで、EとDは月齡を表わしていることが、ティープルにより解明された。

Dはいろいろな文字で表わされる。大きく分けると四つくらいになる。手を使ったもの、上向きガエルを使ったもの、目の接中字をもつ月の文字で表わしたもの、その他、である(図36)。

文字からみて、月齡を計算する方法には、二つの基準があったのではないかと考えられている。それは、図36にあげた例の1と2から推測された考えである。1の例には手が使われている。手はユカテコ語でラフ(Lah)といわれることがあるが、ラフには完了の意味がある。すなわち、月が見えなくなった最初の夜、または見える最後の夜から、月齡を数える。2の例はカエルが上向きになった文字が主字として使われている。この上向きガエルは、二章でも述べたように、「誕生」を意味する。すなわち、月が生まれた日、新月から月齡を数える。この二つの数え方があったというのである。

それでは、3、4にあげた例はどうなんだ、ということになる。それらの説明がつかなければ、先の論は正しいと結論するわけにはいかないのだが、それにしてもこれはひじょうにおもしろい見方といえるのではなからうか。

Cは手の上に可変要素をもち、接尾字として、動詞の過去を表わすといわれているT181が  
つき、接頭字には2から6までのいずれかの数字がつく。可変要素の多くは頭字体で、数1、6、  
7、9、10（の神）の頭字体が同定されている。そのほか、死の神、大地の女神なども同定され  
ているが、小さいこともあって、同定が不十分なものが多い。

Cは、六ヵ月が一単位となった太陰暦を表わす。1Cは一ヵ月目、2Cは二ヵ月目を表わす。  
たとえば12D4Cは、四ヵ月目の一二日を表わす。

Cの意味を発見したティープルはCの係数の分析から、マヤの歴史を三つの期間に分けること  
に成功した。

(1) 独立期（9・12・10・0・0）。各都市ごとに陰暦表記が異なる。

(2) 統一期（9・12・15・0・0）9・16・0・0。六ヵ月からなる陰暦を、起点を設けて表  
記しており、Cの係数は各都市共通である。それゆえ、この期間の石碑は、月齢ばかりでなく、  
Cの係数も計算から予測することが可能である。これはどういうことか、もう少し具体的に述  
べると、5・0・0（360×5=1800）すなわち一八〇〇日は六月より一日か二日少ない。たとえ  
ば、9・13・0・0が5Cで、月齢二二日であるとすると、一八〇〇日ごとのCの係数と月  
齢は次のようになる。

9・13・0・0

5C

22日



9・13	5・0・0	6 C	20日
9・13	10・0・0	1 C	19日
9・13	15・0・0	2 C	17日
9・14	0・0・0	3 C	16日

このようにCの係数はちゃんと決まっているのである。

ティカルではすでに9・4・3・0・0にこの統一暦を採用し、それはカラコル、プシルハーに広まり、さらにコパン、ピエドラス・ネグラスに伝わった。そしてカンペチェや、カラクムル周辺をのぞいて、この統一暦はマヤ地域全体にゆきわたった。

(3) 反乱期(9・16・5・0・0)。9・16・5・0・0にコパンは月の統一暦を最初に放棄した。それ以後、Cの係数は統一期のように一致しなくなり、各都市は独自の暦をもつようになっていく。

このようにティールは時代を分けたが、それはほかの資料からも裏づけられる。たとえば芸術様式から分析した年代区分も、おなじようになる。

プロスクリアコフは、古典期後期を芸術様式の分析から、形成期・装飾期・激動期・退廃期の四つに分けた。9・9・0・0・0(六二三年)以後、地方的な差は消えはじめ、また前期の影響もなくなり、独特なマヤ芸術様式が開花しはじめる。これを形成期という。マヤ地域全体の交

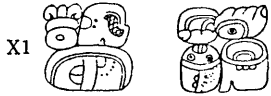
流がふえ、都市間の同盟、戦争などのテーマが石碑に刻まれるようになる装飾期は、ティープルが統一期と名づけた期間に一致する。マヤ文明の全盛期で、9・12・0・0・0（六七二年）から、9・16・0・0・0（七五一年）までの八〇年間に、マヤ全記念碑の約六〇パーセントが建てられている。9・16・0・0・0を過ぎると、これまで記念碑をもたなかった弱小都市で、突然のごとく記念碑が建てられはじめる。女性の像が少なくなり、軍事的色彩が強くなってくる。とくにマヤの西側地域でそれは顕著に現われている。まさに反乱期というにふさわしい。碑に刻まれている人物も静から動に変わり、やがて形の誇張や変形の傾向が強まっていく。そしてマヤ芸術の激動期が過ぎ、退廃期となっていく。石碑には非マヤ的特徴が多く見られはじめ、八〇〇年から九〇〇年にかけて、あいついで活動は停止し、マヤ文明は崩壊する。これが石碑の芸術様式からみたマヤ古典期後期の流れである。

ティープルがCの係数から分けた時代区分とほぼおなじ区分が、芸術様式の分析からも得られることがわかるだろう。

E/DとCにより六ヵ月単位で月齢を表わす方法は、四世紀の中頃にすでにみられるが、六ヵ月を一単位（つまり月で数えた半年）として月を数える方法は、十三世紀の写本といわれている。ドresden絵文書の五一ページから五八ページにもみられる。

Cの次にはXが生起する。Xは異なったいろいろな文字からなる意味不明の集合体である。そ

Cの係数が5か6のとき



Cの係数が1(なし)か2のとき



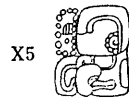
Cの係数が2か3のとき



Cの係数が3か4のとき



Cの係数が4か5のとき



Cの係数が6のとき

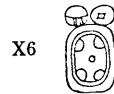


図38 Xの文字

れゆえ、文字Xと名づけられた。しかしながら、文字Xは文字Cの係数に支配されるようで、Cとの関係から、X1からX6までの6つに分類できる(図38)。

文字Bの標準型は、次にあげる四つの要素からできている(図39)。

- (1) 鉤型をした空を表わす文字素 (T187)
- (2) 動物 (T757)、または幾何体 (T141またはT287)
- (3) 楕円形の接字 (T110)

(4) いわゆるカウント接字 (Count Affix。T1、T3、T11、T13、T204、T232など)

Bは、文字Xがないと生起しないことはわかっているが、これも意味がはっきりわかっていない。

文字Aは、文字Eとおなじ二〇を表わす月の文字T683に、9または10の接尾字がついて、その月が二九日の月か三〇日の月かを示す(図40)。

そしてAの次には、三六五日暦の月の表示がくる。二六〇日暦と三六五日暦の生起位置は、しかしながら、いつも決まっているわけではない。キンの文字のあとに二六〇日暦、文字Aのあとに三六五日暦がくる形が一番多いが、二六〇日暦と三六五日暦が並んでキンのあと、Gの前に生起することもある。月シリーズのあとに二六〇日暦、および三六五日暦が生起することもあるし、GFと月シリーズのあいだに二六〇日暦がおかれることもある。ウイナルとキンのあいだにカレンダー・ラウンドが生起する変わった例もある。

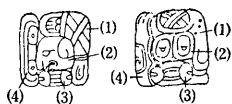


図39 Bの文字2例



図40 Aの文字

ふつう月シリーズは、E・D・C・X・B・Aから構成されるが、Y、Zと名づけられた文字が、FとEの途中に挿入されることもある。このYとZはウスマシンタ流域で、9・8・0・0・0以後生起するのみである。

イニシャル・シリーズに、月や、夜の王の情報を盛りこもうとした試みは、早くからあったようである。Gは、ライデン板(三二〇年)にすでにみられる。初期(バクトゥン8の時代)には、E/D・Cの型があるのみで、XやBや

Aにあたる文字はまだ生起していない。バクトゥン9（四三五年以後）がはじまると、AやXの文字が現われるようになる。E/D・C・X・Aの型はコパンの石碑20（9・1・10・0・0 四六五年）が最初である。Bの文字はずっと下って、古典期後期になって現われる。

ここままで、マヤ暦の基本ともいえるイニシャル・シリーズの説明をいちおう終えたわけであるが、イニシャル・シリーズのなかに、八一九日を一周期とする暦が挿入されることがある。これまでのところ、一五例しかみつかっていないが、色や方角を表わす文字などが生起する興味深い節からなるものなので、説明しておこう。

#### 八一九日周期暦

八一九日周期暦はトンプソンによって発見されたものだが、これは次のような決まった文字からなる節である。

- (1) T588にほとんどいづれもT181がついたもの
- (2) 動物の頭を主字とする文字（T1・758：110）
- (3) 方位の文字
- (4) 色の文字
- (5) 神を表わすと思われる頭字体

ヤシュチラン リンテル29, 30

A1—A4	9 · 13 · 17 · 12 · 10	8 オック
E1—F1	— 1 · 1 · 17	
E2—F2	9 · 13 · 16 · 10 · 13	1 ベン 1 チェン
E3—F5	819日周期節	
G1		13 ヤシュ



ヤシュチラン 石碑11

B'1—B'7	9 · 16 · 1 · 0 · 0	11 アハウ
C'1—C'3	— 1 · 3 · 6	
C'4—C'5	9 · 15 · 19 · 14 · 14	1 イシュ 7 ウォ
C'6—C'9	819日周期節	
C'10		8 セック

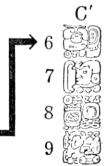


図41 819日節

八一九日周期の節は、イニシャル・シリーズの示す日より、3トゥン以内前の日に関係する。その日はかならず係数が1の日である。この節自体は八一九日を一周期とする暦ではないが、この節が関係する各々の日の間隔が八一九の倍数になるところから、八一九日周期暦といっているのである。たとえば、ヤシュチランのリンテル29、30と石碑11を例にとり説明しよう(図41)。この二つの日付のあいだは一五六一日||八一九×一九となり、八一九の一九倍となっている。なぜこのような節がイニシャル・シリーズの途中にはさまれるのか、その節が解読されていないのでわからないが、八一九という数字が選ばれたのは、なんとか説明可能である。八一九は、一三の天の神、九の地下世界の神、七の地上の神の周期の各々が出会う数(13×9×7=819)であるばかりでなく、九と九一日

$$\begin{array}{r}
 9 \cdot 15 \cdot 19 \cdot 14 \cdot 14 \\
 - 9 \cdot 13 \cdot 16 \cdot 10 \cdot 13 \\
 \hline
 2 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 1 = 15561 = 819 \times 19
 \end{array}$$

方位	東	北	西	南
色	赤	白	黒	黄
日	イミシュ チクチャ ムルック ベン カーバン	イック キミ オック イシュ エツナッブ	アクバル マニック チュエン メン カワック	カン ラマツト エップ キップ アハウ

表3

周期がふたたび巡ってくる日を示す、宗教的に意義ある数と考えられるからである。

図41にあげた八一九日暦で、リントル29、30の1ベンは東と赤、石碑11の1イシュは北と白をもつ節と関係がある。各々の月と方位と色の関係は、表3のようにまとめることができる。

八一九日暦は、古典期マヤの碑文で、絵文書とおなじ方位と色の関係を記した最初の例である。八一九日暦から導かれた表3の関係は、マドリッド絵文書やランダの記述とよく一致しており、古典期からスペイン人の征服期まで、その連合は一貫してつづいていたことがわかる。たとえば、マドリッド絵文書の三四ページには、西—(黒)—カワック、三五ページには南—黄—カン、三六ページには東—(赤)—ムルック、三七ページには北—白—イシュがでてきて、表3の関係とあっている。

八一九日暦はまず、9バクトゥン10カトゥンから、12カトゥンにかけて(六四三〜六九〇年)、パレンケでみられる。それからヤシュチランで用いられ、9・17・2・10・4(七七三年)になって、コ

パンで用いられるようになる。八一九日曆の生起年代からみると、八一九日曆は、パレンケで発明され、そこからヤシュチュランに伝わり、ついでコパンやキリグアに広まった、ということができる。

地理的にみると、次のように考えることができる。八一九日曆は、ウスマンタとモタグア流域で栄えた都市に限られている。この両域にしかないものには、ほかには全身像による時間表記や、期間の終りを示す文字「さかさコウモリ」などがある。碑文もペテン中央地域のものと少しばかりおもむきを異にしている。これらはなにに由来するものであろうか。現在パレンケの近くでは、 Chol 語が話されている。そしてコパンの近くでは、 Chol ティ語が話されている。両地域はマヤ地域の西の端と東の端にあり、かなり離れているにもかかわらず、 Chol 語と Chol ティ語は言語的にはひじょうに近い関係にある。十六世紀頃の言語分布をみると、パレンケからコパンにかけて、带状に Chol 語系のことばが話されていたことがわかる。その状態はきつと古典期時代でもおなじであったらう。文字に中央地域と異なるものがあることや、方言的、文化的な差がからみて、すでに古典期には方言的な差があったと考えることができる。方言的、文化的な差が八一九日曆や全身像による時間表記に表われているというわけである。

八一九日曆という、少しばかり理解のむずかしいものを扱ううちに、古典期の言語状態まで推定することになった。八一九日曆は例が少ないので、それほど問題にする必要はない。重要な



はイニシャル・シリーズなのである。

ここでイニシャル・シリーズの説明がすんだので、簡単にまとめておこう。

イニシャル・シリーズとは、ふつう碑文の最初にあり、碑文の時を定めるものである。まずイニシャル・シリーズの導入文字があり、バクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナル、キンの期間を表わす文字が係数を伴って生起し、GからAまでの文字とカレンダー・ラウンドから成り立っていた。GFは夜の支配者の情報を、EからAの文字は月に関する情報を伝えていた。バクトゥンやカトゥンなどの「期間の文字」が示す年代はちょうど私たちの西暦にあたり、カレンダー・ラウンドの三六五日暦と二六〇日暦は、月日にあたるとみてよかった。私たちがマヤの時を記す場合は、ふつう、GFや月シリーズの情報ははぶき、ただ、9・17・0・0・0 13アハウ18クムクのように記す。

### セカンドリー・シリーズ

イニシャル・シリーズと名づけたものがあつたのだから、セカンドリー・シリーズというようなものもある、と予想されたことと思う。

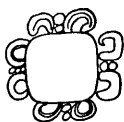
テキストが長くなると、言及する期間が長くなり、長期暦の日付一つだけではまにあわなくなる。それらの日々を表記するために、マヤ人は長たらしい長期暦を繰り返し用いることをせず、

長期暦を土台に、あとの日付はその日から何日たったか、または何日前かを記して、それらの日を定めていた。これを私たちは、イニシャル・シリーズにつづくところから、セカンダリー・シリーズと呼んでいる。

日付の位置づけは、ディスタンス・ナンバーと呼ぶ数で与えられる。その数は一日の場合もあるし、千年におよぶこともある。一番長い例は、チアパの石に刻まれた13・13・1・1・？・（0）・11・4だという。チアパの石の場合を年になおすと、二一八四四〇〇年となる。マヤ人は、なんという大きな時間の観念をもっていたのであろうか。

ディスタンス・ナンバーを表わす文字は、イニシャル・シリーズで用いられる「期間の文字」とほぼおなじ文字が使われる。しかしチアパの石にみられるように、バクトゥンより大きな期間を扱った文字がいくつかある。

ディスタンス・ナンバーとは、ある日と他の日のあいだの日数ということが出来る。だから長期暦の9・17・0・0・0なども、13・0・0・0・0という日から9・17・0・0・0だけだったことを表わしているのだから、ディスタンス・ナンバーだということもできる。だがふつうはそうはいわない。まず長期暦で、ある日を定める。その日から何日たったかをディスタンス・ナンバーで示し、その日がカレンダー・ラウンドの何月何日にあたるかを記す。さらに次の日が必要なら、その日から何日たったかをディスタンス・ナンバーで示し、その日が何月何日にあ



T 126



2 ウイナル 0 キン  
2・0

図42



15カトウン 1 トウン 16ウイナル 5 キン  
15・1・16・5

るかを記していく。こういうふうにして、必要な日を定めるのである。

初期のテキストは一般に短いので、イニシャル・シリーズだけで、ほかに時を記す必要がなかった。それゆえ、セカンドアリー・シリーズはない。しかし、9・0・10・0・0（四四五年）には、セカンドアリー・シリーズが現われる。

ディスタンス・ナンバーは、期間を表わす文字が係数を伴って、時を記す場合とおなじようにして表わされる。ただ順序が異なる。キン、ウイナル、トウンといったふうに、小さい単位から大きい単位の順に並び、長期暦の順とは反対になる。だが長期暦とおなじように、大きい単位から小さい単位に並んだ例もないではない。ディスタンス・ナンバーに用いられる文字は、キンをのぞいて、長期暦（イニシャル・シリーズ）に用いられる文字とおなじであるが、ふつうディスタンス・ナンバーには、イニシャル・シリーズにない特別な接尾字がついている。この接尾字 T 126、またはそれに似た接尾字は、「期間の文字」の一つだけにつく場合が一般的だが、ディスタンス・ナンバーのすべての文字につくこともある（図42）。

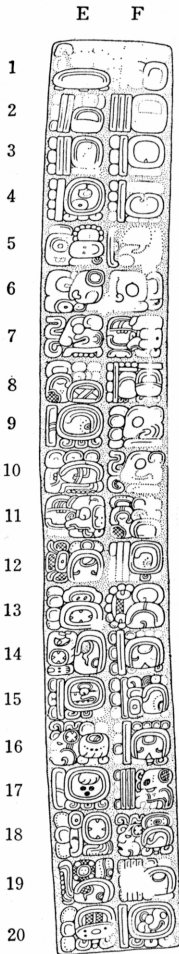


図43 ナランホの  
石碑22  
(I. Graham 画)

多くの場合、キンの文字は省略され、その係数だけがウイナルの文字につく。その場合ふつう、キンの係数は左側につき、ウイナルの係数は上につく。だが逆の場合もある。そのためどちらがキンの係数かウイナルの係数なのかわからなくなるが、一般原則がある。それは、「左上を占めるほうの接字が先に読まれる」という原則である。左上端の一角を占めるほうが先に読まれるので、それがキンの係数ということが出来る。もちろん例外もある。しかしふつう、係数を読んで、次に計算をしてディスタンス・ナンバーの次に記されている日付が計算どおりあっていくかどうか試す作業をかならず行なうので、どちらがキンの係数かウイナルの係数か問題なくわかる。そこで一つ例題をだしてみよう(図43)。例はナランホの石碑22である。だいたい不明なところがあるが、計算していけば問題はない。

E 1からE 6までがイニシャル・シリーズ(略してISとも書く)である。E 1はイニシャル・シリーズの導入文字である。F 1はバクトゥンであるが、消えて読めない。しかし、石碑のほと

んどはバクトゥン9であるから、ここでも9バクトゥンとみても問題なからう。E2はカトゥンであることは文字の形からわかるが、係数は11か12か13かわからない。しかしよくみると、真中の丸が少し大きいので、それが装飾要素か、それとも上下二つの丸が装飾要素かのどちらかと考えられる。そうすると、11か12カトゥンのどちらかにしぼられる。トゥンとウィナルは問題ない。15トゥンで13ウィナルである。キンの係数は、カトゥンの場合とおなじように6か7かわからない。しかし、二六〇日曆(E4)と三六五日曆(E6)ははっきりわかる。9マニック0カヤップである。9マニック0カヤップは9バクトゥン12カトゥン前後では、9・12・15・13・7しかない。それゆえ、カトゥンとキンの係数は12と7と定まった。

このイニシャル・シリーズの示す月にながおこったかは、F6とE8までの文字が語っている。じつは「ひげリス王」が誕生したことが記されているのだが、歴史的解釈はのちに述べることにして、日付だけを問題にしよう。

F8にはディスタンス・ナンバー(略してDNとも書く)が記されている。キンが9でウィナルが8、トゥンが5、つまり5・8・9と読める。9・12・15・13・7 9マニック0カヤップから5・8・9たった日はしかしながらE9、F9に記されているように、5カワック2シユルにはならない。

5・8・9を日になおすと一九六九日となる。一九六九は二六〇日曆が七周して一四九日たっ

た日である。その日は2キップとなる。計算からだすには、一九六九を二〇と一三でそれぞれ割ればよい。二〇で割ると九あまる。つまりマニックから九日目のキップである。また一三で割ると六あまる。9マニックの9に6を足すと15であるが、二六〇日暦の係数は13までしかないので、2となる(15-13=2)。計算ではこういうふうにして2キップがでてくる。

三六五日暦のほうはどうなるかといえば、一九六九を三六五で割ればよい。つまり五となり、あまりは一四四となる。カヤップの次はクムク、その次は五日しかないワイェブであることを考慮に入れて、計算していけばよい。そうすると19セックという日がでてくる。

2キップ19セックというカレンダー・ラウンドの日が計算から導きだされたが、E9、F9に記されている5カワック2シユルと違っては、5・8・9だけ前の日なのだろうか。9・12・15・13・7から5・8・9を引いた9・12・10・4・18は3エツナップ16チェンであり、やはり5カワック2シユルにならない。ということ、ディスタンス・ナンバーの読み方がまずかったことになる。キンとみた係数の棒に縦線がはいっているが、これを飾りとみたのがわるかったのだろうか、四つの丸のうちのいくつかが飾りだったのだろうか、ウィナルの係数は8でいいのか、ウィナルとキンの係数は逆ではないのか、など検討してみなくてはならない。そのような試行錯誤の結果、5・8・12であれば、9・13・1・3・19 5カワック2シユルとなり、矛盾がなくなる。日の係数は9ではなく12であった。棒は一本ではなく二本で、四つある

E 1—E 6	9・12・15・13・7	9 マニック 0 カヤツブ	I S
F 8	5・8・12		DN
E 9—F 9	(9・13・1・3・19)	5 カワツク 2 シュル	
E12	1・0		DN
F12—E13	(9・13・1・4・19)	12カワツク 2ヤシュキン	
F14	4・6		DN
E15—F15	(9・13・1・9・5)	7チクチャン 8サツク	
F16	4・9		DN
E17—F17	(9・13・1・13・14)	5イシュ 17ムアン	
F19—E20	1・2・16		DN
F20—G 1	(9・13・2・16・10)	5オック 8クムク	

表 4

とみた丸のうち二つは裝飾要素だったのである。次のディスタンス・ナンバーは E 12 に記されている。1・0 のディスタンス・ナンバーがあり、11 か 12 か 13 カワツク 2 ヤシュキンが記されている。5 カワツク 2 シュルから二〇日たった日は 12 カワツク 2 ヤシュキンであるので、この日は 9・13・1・4・19 12 カワツク 2 ヤシュキンと定めることができる。

こういう計算をしていくことによって、時を定めることができるのである。これらを、ふつう表 4 のように書く。この表のかつこのなかの日付は、実際には示されておらず、計算から出したものであることを表わす。

いまみたナランホの石碑 22 は、ごくふつうの例である。このほか、ウイナルとキンの係数が逆になった例や、係数が 0 である「期間の文字」がはぶかれた例、一番大きい単位がわざわざ 0 の係数をつけて記されている例など、いろいろ変わった例もある。

後の日の標示、または計算を先にすすめる標示。足し算をして目標の日付に導く。



幾何体

頭字体

図44 ディスタンス・ナンバーの導入文字

前の日の標示、または計算を前にもどす標示。引き算をして必要な日を導く。



図45



図46 古い日の日付標示

素が使われることがある(図46)。  
 キンの文字はふつう省略され、係数だけがウィナルの文字につくと先に述べたが、キンの文字が生起  
 パレンケヤトルトゥゲロでは、古い日(前の日)の日付標示として、へび(または虫)の形をした文字

字は、後の日の標示と前の日の標示の文字とみなすこともできる。  
 足したら、求める日がでてきたが、引いて導く場合もある。しかし  
 ふつうは、引くか足すかは、図45に示した文字で示される。この文  
 字は、後の日の標示と前の日の標示の文字とみなすこともできる。  
 わかっている。またこの文字の生起・非生起を支配する法則もわ  
 かっていない。図44に示したようにこれにも幾何体と頭字体がある。  
 ナランホの石碑22の例では、前の日にディスタンス・ナンバーを

ナランホの石碑22では、いきなりディスタンス・ナンバーがでて、その日  
 数だけ前の日からたったカレンダー・ラウンドの日付が次に記されていたが、  
 そんな例ばかりではない。ディスタンス・ナンバーにも、イニシャル・シリ  
 ーズにあったような導入文字が先行することがある(図44)。この導入文字は、  
 次にディスタンス・ナンバーがくるということを知らせる役目以外、意味は





図47 ディスタン  
ス・ナンバー  
のキンの文字

することもある。この場合、キンの文字は  
イニシャル・シリーズで使われる文字とは  
違い、図47に示したような、貝や動物やア  
ハウのさかさになった文字などが使われる。

### 「期間の終り」を表わす文字

ここまでで、ごくふつうのテキストの、時の表記の仕方の説明のほとんどを行なったことにな  
る。残りは「期間の終り」をうまく利用した方法だけといってよい。それはこれまで述べてきた  
いろいろな暦の周期の違いをうまく利用した方法である。

これまで述べたテキストは、まずイニシャル・シリーズがあり、次にセカンダリー・シリーズ  
と呼んだものが生起するものであった。これがふつうの形である。しかし後期になると、暦に熟  
知してきたためか、省略が多くなってくる。とくに、イニシャル・シリーズという長たらしい表  
記法など用いないで、簡単に時を表記した例がふえてくる。

もっともよく用いられたものは、トゥンやカトゥンの終りとカレンダー・ラウンドの組み合わせ  
である。この方法によると、長期暦ほど正確ではないにしても、ほぼおなじくらい正確に絶対  
年を記すことができる。どうしてそのように正確に時が記せるかを説明してみよう。

トゥンやカトゥンやバクトゥンの期間の終りは、いうまでもなく、ウィナルとキンが0、つまり、最後の二桁が0・0のときである。カレンダー・ラウンドは一周期一八九八〇日であったが、それと、0・0、つまり三六〇日の組み合わせを考えると、2・7・9・0・0、日数になおすと、三四一六四〇日に一回しかおなじ組み合わせがないことになる。たとえば、9・0・0・0・0は8アハウ13ケフであるが、8アハウ13ケフがふたたび巡ってくるのは一八九八〇日、すなわち2・12・13・0の倍数日だった日である。9・0・0・0・0の次は、9・2・12・13・0、その次は9・5・5・8・0……といった日になる。長期暦で0・0で終る日、すなわちトゥン完了の日と8アハウ13ケフがふたたび巡ってくるには、三六〇と一八九八〇の最小公倍数である、2・7・9・0・0たたなければならぬ。

それだけの日数がたたなければならぬということは、マヤの歴史時代(8・12・0・0・0頃から10・4・0・0頃までのあいだ)では、一回しかおこりえないということである。これがカトゥンの終りとカレンダー・ラウンドの組み合わせになると、六八三二八〇〇日に一回となり、もっと正確に、ほぼ長期暦とおなじくらい正確に時を定めることができる。

というわけで、ある期間の終りを示す文字と、カレンダー・ラウンドの日付だけで、長期暦の表記がなくとも、マヤの絶対年を定めることができるのである。たとえば、「5アハウ18パシュ、トゥンの終り(の日)」は、9・2・16・0・0と定められ、そのほかの6・15・7・0・0や、

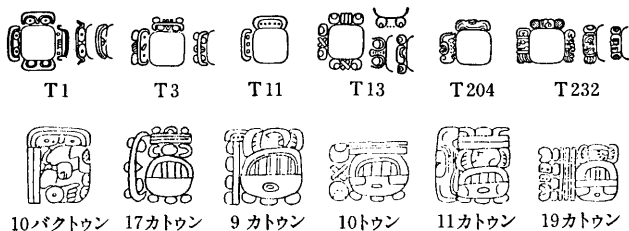
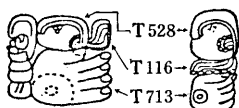


図48 カウント・グループ

11・10・5・0・0などは、歴史時代からはずれるので排除される。トウンの終りと、カレンダー・ラウンドの組み合わせによって示される日は、ふつう碑文の最後に生起する。これは、碑文の最後の日であるから、奉納日（または建立日）と考えてよい。その日は、トウンが0、または10のときが多い。しかし5や15トウンのときもある。つまり、マヤの石碑は、ふつう一〇年または二〇年ごとに建てられているのである。たとえば、ナランホでは、ほとんどの石碑は一〇年ごとに建てられている。しかし、ピエドラス・ネグラスやキリグアでは、ほとんどの石碑が五年ごとに建てられている。

トウン（カトウン）の終りとカレンダー・ラウンドは、ごくふつうのテキスト、つまりイニシャル・シリーズがあり、それにつづくセカンドリー・シリーズがある碑文に用いられるが、もちろん先に述べたように、長期暦のかわりを果たせるので、イニシャル・シリーズのかわりとしても用いられる。

「期間の終り」とカレンダー・ラウンドの組み合わせによる時の表示を、ピアリオド・エンディング、略してPEと呼んでいるが、「期間



13・0・0・0・0



9・8・0・0・0 5アハウ3チェン

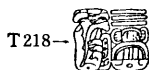


9・15・0・0・0



9・13・0・0・0 8アハウ8ウオ

図50



9・15・0・0・0

図49



図51

- の終り」を表わす方法は、大きく分けて九つある。
- (1) 同価とみられる接字群の使用。これらの接字とは、トンプソンがカウント・グループと名づけた、T1、T3、T11などである(図48)。
  - (2) T218(手)と、T575(貝)またはT683(月)の使用(図49)。
  - (3) T528(カワック)とT116の使用。カウント・グループの接字やT713をともに用いる場合が多い(図50)。
  - (4) 「さかさコウモリ」の使用。期間の文字の前において、「期間の終り」を表わす。この方法はペテン中心部にはみつかつておらず、パレンケ、ポモナ、ヤシユチラン、キリグアに限られ、六例しかみつかつていない(図51はヤシユチランの「さかさコウモリ」)。

マヤ人はしやれや冗談を好む人々だ



図52

期間の半分  
を示す文字



←カトゥン

9・15・10・0・0

期間の半分  
を示す文字



9・13・10・0・0

7アハウ3クムク

図53

といわれているが、この例など、機智に富んでいる。マヤの思想では、流れゆく時は、それぞれの運び手（神）が割り与えられた期間の荷を運び、次の神に手渡すことで進む、とみられていた。あるカトゥンを運んできた神が役目を終えて休息につく。それがその期間の終りである。一方コウモリはさかさになって休む。つまり、神が休むという概念、いかえればその期間の終りという概念を、さかさになって休むコウモリの姿で表わしているとみることができるのである。

(5) ホトゥン (hor) は5を意味するので、5トゥンつまり0・0・0、5・0・0、10・0・0、15・0・0)の終

りを示す文字の使用(図52)。この文字は、ホトゥンごとに祝う特別な祭を示す文字と考えられる。(6) 期間の半分を示す文字の使用。期間の半分を示すのだから、カトゥンの半分だと10トゥン、バクトゥンの半分だと10カトゥンということになる。10トゥン、または10カトゥンを示す文字と  
いうこともできる(図53)。

(7) 5トゥンと15トゥンは、次の方法によって示される。5の係数とT116がついたカワック



8 チクチャン  
図55



G2



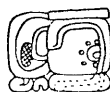
18サック



T158



T4



15トゥン  
図54



5トゥン

でも、「5足りない」という概念を表わすために使われる場合があることもわかった。

(8)文字G(F)とカレンダー・ラウンドによる表記(図55)。Gには九つの種類があり、それがとぎれることなく順に繰り返されることはすでに述べた。カレンダー・ラウンドは、一八九八〇日ごとに繰り返されることも述べた。この二つ、九日で一周期の暦と、一八九八〇日で一周期の暦を組み合わせることで、時を記す方法である。

九と一八九八〇は約数をもたないので、 $9 \times 18980 \parallel 1 \cdot 3 \cdot 14 \cdot 9 \cdot 0$  ごとに一回しか、おなじ組み合わせの日は生じない。マヤ歴史上の日付の九〇パ

(T528)に、T4がつくことで5トゥンが示され、T158がつくことで15トゥン(つまりカトゥン完了に5トゥン足りないこと)が示される(図54)。

これまで、係数5とT158は、15トゥン、すなわち、カトゥン完了までに5トゥンである、という概念を表わすために使われることしか知られていなかった。しかし、三六五日暦の日付表示に、5の係数とT158が使われている例がみつかったため、トゥン以外



9・14・0・0・0・0 6アハウ13ムアン

図57 ナランホ石碑23



9バクトウン  
図56

1セント以上はバクトウン9のものであるので、Gとカレンダー・ラウンドによる表記だけでもほとんどまちがいになく長期暦上の日付を定めることができる。

この方法は簡便であり、「期間の終り」でない日を記すときでも用いられている。しかし、広く用いられることはなく、ウスマシントラ流域地方、とくに、トニナやオコシソゴ地域で好まれたにすぎない。この地方では、長たらしい長期暦による表記をさげ、この簡単な表記法によって日付を表わすことが多かった。

(9)セカンダリー・シリーズ(ディスタンス・ナンバー)の導入文字といくぶん似ている文字の使用(図56)。

以上みてきたことでわかるように、「期間の終り」を示す方法はたくさんあった。これらは単独で生起することもあるが、ふつう、重複して用いられることのほうが多い。たとえば図57にあげたナランホの石碑23の場合、(1)、(2)、(3)、(5)の四つの方法が用いられ、9・14・0・0・0・0 6アハウ13ムアンという日付が記されている。

短期暦

ユカタン北部では、イニシャル・シリーズによって時を記す方法はほとんど用いらなかった。たとえば、北部の代表的な遺跡であるチチェン・イツァでは、たった一つしかない。ハイナ、オシキントック、シユカルムキンでもイニシャル・シリーズをもつ石碑は一つしかないし、サンタ・ロサ・シユタンパックでは二つしかない。プウク地方の大遺跡ウシユマルやカバフやラブナールにいたっては、イニシャル・シリーズは全然用いらなかった。南部の諸遺跡と同様にイニシャル・シリーズが用いられたのは、わずかにコバーだけである。

また、ディスタンス・ナンバーによって日の関係を記すことも、北部ではコバーをのぞいてなかった。南部ではよく用いられた、「期間の終り」を利用して時を記す方法も用いらなかった。それでは、どのようにして時を記していたかという点、カトゥンの終る日の名でそのカトゥンを呼ぶ方法を用いていたのである。

カトゥンは「期間の終り」で述べてきた例をみればわかるように、つねにアハウの日で終った。二六〇日暦は一三の数と二〇の日からなるが、二〇の日のうちのアハウがカトゥンの終りであるとして、一カトゥンは七二〇〇日であるので、つねにアハウがカトゥンの終りの日になる。そのアハウでカトゥンを呼ぶ方法を用いていたのである。たとえば、2アハウのカトゥン（カトゥン2アハウ、またはたんに2アハウ）とは、2アハウで終るカトゥンの二〇年間をさす。





9 ラマツト

11 ヤシュ

13 トウン 1 アハウ

図58 「4つのリントル」の一部

1 カトウンは七二〇〇日であるので、アハウの係数は、 $7200 \div 13 = 553 \dots 11$ となり、11ずつふえる。たとえば現カトウンが2アハウだとすると、次のカトウンは、 $2 + 11 = 13$ であるから13アハウ、その次は、 $13 + 11 = 24$ （日の係数は13までしかないので11）となるから、11アハウである。このように、アハウの係数は、 $2 \cdot 13 \cdot 11 \cdot 9 \cdot 7 \dots$ というふうに、2ずつ減っていく。そして、約二六〇年（正確には一三×二〇×三六〇日）でふたたびもとのカトウン2アハウにもどる。つまり、二六〇年の範囲でしか正確に時を記すことができない暦ということになる。長期暦や「期間の終り」を利用する方法と比べて、かなり不正確であり、短い期間しか正確に時を記せないところから、これを短期暦と呼んでいる。

短期暦によって時を記す方法は、古典期の終り頃のチチェン・イツァの碑文などにみられ、その後も、スペイン人の征服後まで用いられたようで、チラム・バラムの書などに、その例を見いだすことができる。

チラム・バラムの書から例をひいてみよう。

「(カトウン) 8アハウ、チャカンプトウンはイツァ族によって放棄された」。8アハウは、ユカテコ人のマヤ学者バレラ・バスケスらの解釈では、10・6・0・0・0 8アハウ8ヤシュ(九二八〜九四八年)にあたる。

「(カトゥン) 7アハウ、僧ランダは死んだ」。僧ランダが死んだのは、一五七九年四月二十九日(ジュリアン暦)であり、マヤ暦の11・19・0・0・0 7アハウ13チェン(一五七九〜一五九九年)にあたる。

碑文は、チラム・バラムの書の表現と少し異なっている。図58の例は、チチェン・イツァの「4つのリントル」からとったものである。(カトゥン) 1アハウの13トウンの9ラマツト11ヤシュと書かれている。長期暦では、10・2・12・1・8 9ラマツト11ヤシュにあたる。

碑文とチラム・バラムの書のいい方と比べると、碑文のほうがはるかにくわしく書かれている。しかし古典期の表記と比べたら、まだ不正確である。どこが違うかといえ、1アハウの次に三六五日暦が記されていないところである。もし1アハウの次に、3ヤシュキンという三六五日暦の日付がついていたなら、カトゥンの終る日は10・3・0・0・0 1アハウ3ヤシュキンとたちどころにわかる。

チラム・バラムの書からひいた例は、もっとむずかしい。カレンダー・ラウンドも、トゥンの記述もない。ただ8アハウとか、7アハウという記述だけである。もし8アハウに8ヤシュという日がついていたなら、誤りなく、10・6・0・0・0という日を定めることができたであろう。しかしそれがなかったため、解釈には二六〇年の差がでる。10・6・0・0・0ではなく、9・13・0・0・0かもしれないし、10・19・0・0・0かもしれない。短期暦は二六〇年(13・0・0・

0) ごとに繰り返されるので、長期暦上の日付がはっきりしないのである。

この章では、マヤ人たちが時を記すために用いた長期暦や、「期間の終り」を利用する方法や、短期暦などを学んだ。これで歴史的解釈をするための枠組となる日付についての知識は、いちおう学んだことになる。

テキストを分析するうえで一番大切なことは、日付を知ることである。その次が日付に伴う節の分析である。テキストの分析は、最近急速に進んできた。それについては次章で述べることにしよう。